



その気持ちを共感し合いたい。

ふたつめは、流れ星のように別れた人達がいた。不意の災害や病のために言葉を遺せず亡くなった人達。彼らと共に生きた日々を残しておきたいと思つた。

その文章を並べて点から線に繋いでみる。さらにエピソードや想い出を加えて線を面へとし、自分史にまとめてみよう。

古く縮こまった毛糸を解し、暖かいセーターに編み直すように。

「忘れないよ。覚えていたい」と想い、感謝のメッセージを込めて……。

だから、自分史でありOUR・HISTORY。  
稚い唄りながら、喜び・愛をふり返るエピソードを語りたい。

第一章 甘酸っぱいちちつちつこ



実家から湾を眺む（約 25 年前）

## 初めての家族写真

岩手県三陸村はリアス式海岸沿い。岬突端

「首崎」辺りは豊かな漁場があった。内湾は若布・

海苔が繁り、雲丹・鮑などの海の幸に恵まれていた。

私は第一次ベビーブームに山合いの公民館で生ま

れた。母は四十一才だった。誕生が重陽の節句前後

だったのでそれに恩んで名前をつけてくれた。

住まいの公民館は竈のある台所と二部屋だった。

一つの布団に何人も一緒に寝ていた。初めの風呂は

外の堀っ立て小屋だった。使われていない時の公民

館の広間は格好の遊び場。布団置き用の継ぎ板机で

卓球もしたと言う。公民館利用者はトイレに行く時、

茶の間を「ごめんなはりゃんせ」と言いながら通った。

三陸では土地も細く、この公民館奥が空いていた

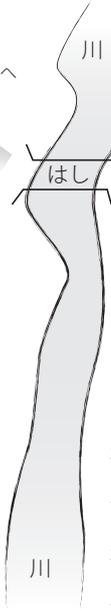
のは幸運だったと思う。

山合いの公民館

台所と寝室の間に  
茶の間に入る間がある



三五郎さんの家へ  
ゆく道



川別家に  
行き来する道

柿の木  
まま

川  
使い川  
入口



石段



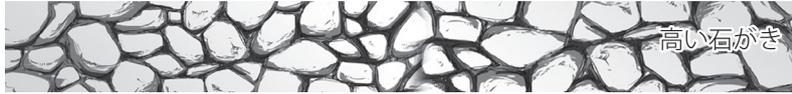
風呂のない時  
は高目の敷居に  
三人並び、足を  
順にバケツに入れ、洗ってもらった

出窓になって  
おり飛んだり  
はねたりあそんだ

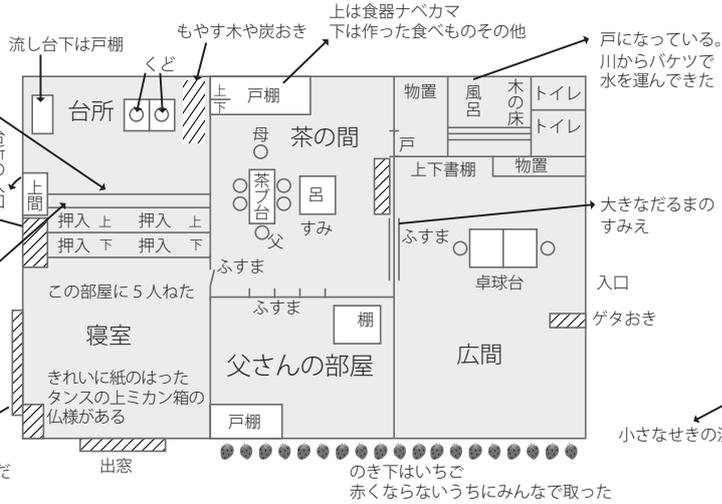
柿の木

柿の木

川



高い石がき



家に入る道



低い石がき

大根 畑 ジャガイモ トマト



火のみやぐら